



～ 第20回パッションフルーツ品評会の審査結果 ～

このたび、小笠原アイランス農業協同組合が設立されて初めてとなる、パッションフルーツ品評会が盛大に開催されましたことに、心からお慶びを申し上げます。

前農協から合わせて20回目となる今年度の品評会は、6月11日に農産物観光直売所会議室において、農協や小笠原村、小笠原支庁産業課、農業センターおよび営農研修所の合計8名の審査員により行われました。

今年のパッションフルーツ栽培は、昨年秋口からの長雨を受け、初期生育には苦慮されたことと思います。加えて、今年度から5月に変更となった「おがさわら丸」長期連休の影響を受け、思うような出荷ができませんでした。そのような状況下においても、生産者や農協の皆様の不断の努力により、日本一といわれる高品質な果実が今年も生産・出荷され、好評を博していると同っております。

今回の品評会には8点の出品がありました。審査項目は、果実の形状や光沢、揃い、熟度、病虫害の有無、品種の特性、消費者ニーズ等の商品性で、総合的に評価しました。出品物はいずれも揃いや色艶が良く、病虫害もなく、小笠原のパッションフルーツ栽培における高い技術力を感じる品評会となりました。

その中でも金賞と銀賞を受賞した出品物は、全ての果実の形状・着色程度の揃い良好で、十分な熟度と重量・艶があり、特に果実の黒紫色がすばらしい逸品でした。特に金賞の出品物は、色回りが際立っており、満場一致で上位とさせていただきました。銅賞となった出品物も、揃いや色艶が申し分なく、次点となった出品物と甲乙つけがたい審査となりましたが、紫色の発色がより強いものを銅賞に選出させていただきました。

生産者の皆様は、高温障害対策や仕立て方など様々な技術開発に取り組むだけでなく、生産者同士の交流が活発で常に技術研鑽に励まれています。皆様の日々の丁寧な栽培管理に敬意を表するとともに、今後とも小笠原パッションフルーツのブランド力向上に期待いたします。

＜審査委員長：所長 吉原＞



図1 品評会後に行われた店頭展示

金賞	小笠原村長賞	母島	小松	朗生	農園
銀賞	小笠原支庁長賞	母島	松	本	農園
銅賞	農協組合長賞	母島	濱	崎	農園

～法面緑化工事への利用が期待される草種の特性～

小笠原諸島には、植物の自生種（固有種を含む）が300種程度確認され、貴重な自然環境の形成に寄与しています。島内の植生回復の際にこれら自生種を活用できれば、小笠原の魅力がより高まると考えられます。しかし自生種の栽培技術はほとんど確立されておらず、活用する際の障害となっています。

今回は公共工事等で造成される法面の緑化への利用が期待される自生4草種の定着力に関する調査を紹介します。

まずは根の張り方を調査しました。株分け後3か月栽培し、根重を測定したところ、ムニンナキリスゲとクロガヤは根の増加が少なく、コゴメスゲとムニンテンツキは多いことがわかりました。またクロガヤに比べてムニンナキリスゲは、根が狭い範囲に集まる傾向にありました（図1）。

次に、斜度別に定植し、その後の枯死率や状態を調査しました。斜度が30度を超えると枯死が出始め、40度では枯死が目立ちました（図2）。枯死株は大雨後に根元からえぐられていたことから、土壌流亡が枯死に影響していると考えられました。草高や開花・結実等に差はみられませんでした。

最後に同じ斜面に4草種を植え付け、繁茂していく様子を撮影し、画像処理ソフトウェアを用いて被覆率を調査しました。30度を超える急斜度で日向になる斜面では枯死が相次ぎ、土壌流亡の対策措置が必要と思われ

ました。一方で、その他斜面では順調に被覆率が増加し、2年で80%程度に至りました。

農業センターでは、これからも自生種の効率的な増殖法や活用法、外来種対策などの試験を、総合的に進めていきます。

＜自生種担当：北山＞



図1
クロガヤ（上）とムニンナキリスゲ（下）の根の広がり方

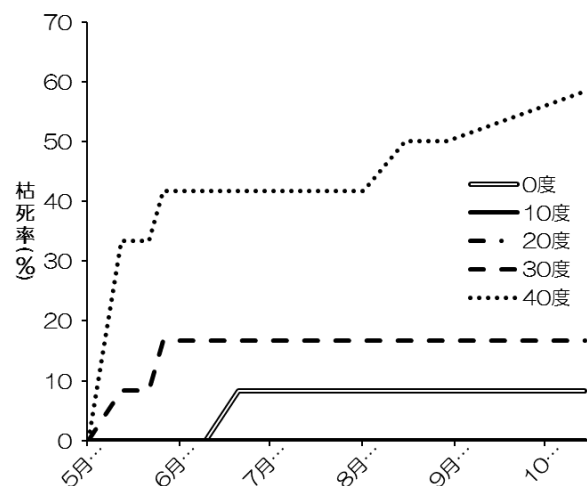


図2 斜度別の枯死率推移

今年度の農業者セミナーの開催について

今年度の農業者セミナーは、2回程度開講予定です。初回は野菜情報をテーマに計画中です。ご要望テーマがありましたら、農業センター及び営農研修所までご意見をお寄せください。各回の詳細は決まり次第、「村民だより」等でお知らせ致します。

～ アフリカマイマイの分布調査結果 ～

アフリカマイマイの発生動向を明らかにするため、1985年から父島と母島で2～4年ごと（2004年以降は2年ごと）に分布調査を行っています。今回は2020年の調査結果を報告します。

アフリカマイマイの行動が活発な5月に、父島48地点、母島50地点で生貝発見および生息密度を調査しました（図1）。生貝発見を発見したのは父島で3地点（前回5地点）、母島で33地点（前回35地点）で

あり、発見地点率は父島では6.3%、母島は66.0%と、ともに前回の調査（2018年）より減少していました（図2）。

次に、生息密度では父島は0.026個体/分（前回0.093個体/分）で減少しましたが、母島では0.55個体/分（前回0.31個体/分）と増加していました（図3）。引き続き、防除対策の参考にしていくため継続的な調査を行っていきます。

＜病害虫担当：遠藤＞

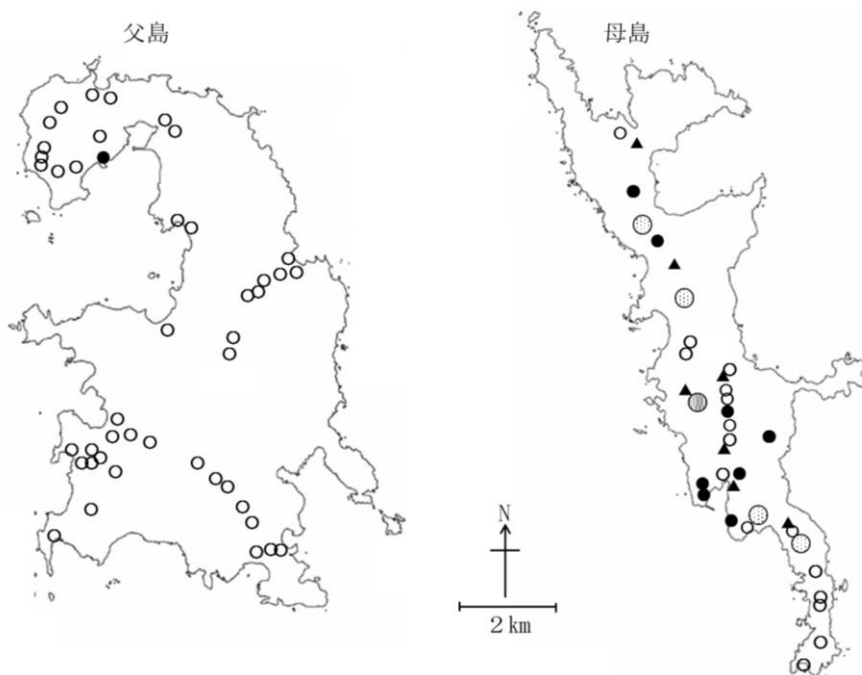


図1 アフリカマイマイの生貝分布および各調査地点での生息密度
○：0, ▲：0<～≤0.1, ●：0.1<～≤0.5, ○：0.5<～≤1, ○：1<～≤2, ●：2<～

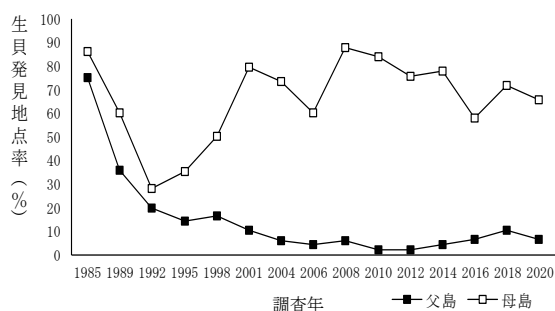


図2 アフリカマイマイ生貝発見地点率の推移（1985年～2020年）

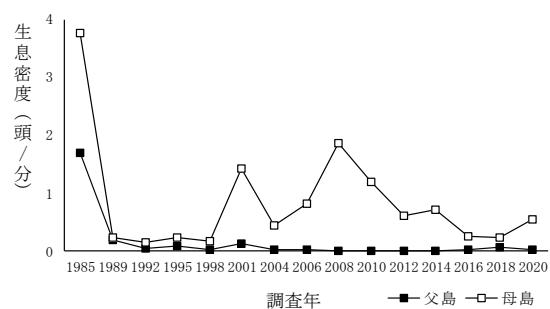


図3 アフリカマイマイ生息密度の推移（1985年～2020年）

～ シカクマメ5品種の特性比較 ～

シカクマメは熱帯原産のマメ科植物で、日本では主に沖縄県などで商業栽培がされている野菜です。小笠原では島野菜として人気が高く、主に7月～9月に収穫されています。現在、小笠原では1980年代に導入した登録品種「ウリズン」の自家採種系統が主に栽培されています。近年、小笠原において他品種を栽培した事例が少ないため、市販されている品種の特性比較を行いました。

「シカクマメ（サカタのタネ）（以下「サカタのタネ」）、シカクマメ（中原採種場）（以下「中原採種場」）、早どり四角豆（トーホク）、わこさま（ナント種苗）、うりずん（フタバ種苗卸部）」の5品種を供試しました。3月上旬播種、4月中旬定植し、直立ネット仕立てで栽培を行いました（図1）。



図1 直立ネット仕立て

各品種の総収量および月別収量を表1、図2に示しました。総収量を比較すると、「サカタのタネ」が最も多く、次いで「中原採種場」、「うりずん」、「早どり四角豆」、「わこさま」の順に多くなりました（表1）。月別収量は各品種同様の傾向がみられ、5月下旬から6月上旬に収穫が始まり、7月に最初の収穫盛期を迎え、9、10月にかけて2度目の収穫盛期を迎えました（図2）。

各品種の収穫物について、小笠原村民28人を対象に食味のアンケートを実施したところ、食味評価に違いはありませんでした。

これらの結果から、小笠原においては収量の多い「サカタのタネ」の導入により、高い収益性が得られると考えられました。

＜営農研修所：五十嵐＞

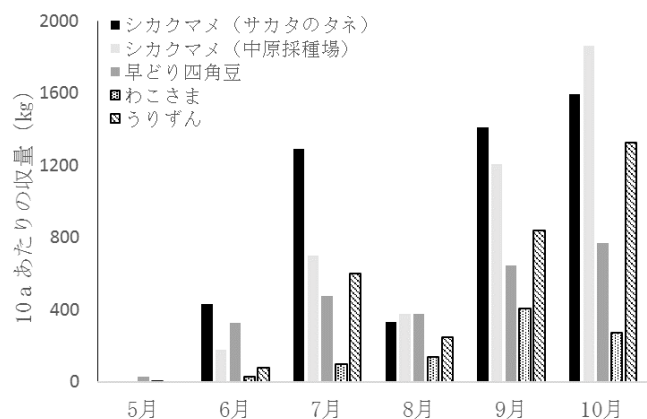


図2 各品種の月別収量

表1 10aあたりのシカクマメ各品種の収量比較

品種名	種苗会社	収量 (kg)				A級品率 (%)
		A級品	B級品	C級品	総収量	
シカクマメ	サカタのタネ	3871	598	583	5052	76.6
シカクマメ	中原採種場	3321	396	608	4325	76.8
早どり四角豆	トーホク	1894	334	392	2619	72.3
わこさま	ナント種苗	272	109	551	932	29.2
うりずん	フタバ種苗卸部	2516	193	381	3091	81.4

このニュースや試験成績概要は、亜熱帯農業センターのウェブサイトにも掲載しております。

検索

小笠原支庁 → 小笠原亜熱帯農業センター → 農業センターニュース・試験研究成果概要

<https://www.soumu.metro.tokyo.lg.jp/O7ogasawara/farm/>